

「野分き立」

登場人物

川崎照代 作

二場

内藤 宗一 (七十六歳)	築地半の家屋に現在、佐和子綾子と三人で生活 宗一の妻 現在管理栄養士
佐和子 (四十五歳)	長男 北海道大学卒
邦彦 (二十二歳)	長女 短大卒
綾子 (二十歳)	綾子の父 海外出張多くロンドンで帰国定年退職
山村 健二郎 (五十八歳)	宗一の長女 内藤家相続人
鈴子 (五十歳)	健二郎の妻
大月 夕カ (六十九歳)	宗一の妹
野本 (三十歳)	

内藤 宗一 十六年別三才建築士 大光建設設計部勤務

時 一九九四年秋

所 東京——古くからの住宅街の一角にある、内藤宗一の家

舞台

築四十年以上の木造家屋。和室を板張りに替え、二間をぶち抜いて使っているが、天井や壁、欄間などそのままで、ちぐはぐな感じ。上手奥に玄関。正面はガラスの引き戸。その奥に廊下を挟んで客間、宗一の居室。下手寄りのガラス戸はテレビ、サイドボード、電話台などで引き戸の一枚を残して塞がれている。上手手前にドア。その先に綾子の部屋と廊下の突き当たりに便所。奥寄りに二階への階段口。上手側に古びたソファ、椅子、テーブル。下手側にダイニングテーブルと椅子。下手手前から台所に通じる。全場を通じて変わらない。

翌日の午後。

ヒュー。ガタン。ザザーと風雨の音。時々突風で家のあちこちでガタン、ビシッと音がする。

宗一がハンガーにかけて邦彦の上着をタオルでふいている。

佐和子は邦彦の背中やズボンを拭いている。

邦彦 (タオルを手に) 何なのさ。いきなりガアガアわめいちゃって。母さんこいつち

よっと黙らせなよ。俺話あるんだから。ヒャー。大した雨でもないのに風が舞ってんの。傘なんか役に立ちゃしないんだから。

綾子 一大事件なのよ！ お兄ちゃんに電話して帰ってもらって家族会議しなきゃって思ってたところなのよ。だから――。

邦彦 (濡れた髪をふきながら) お帰りも言ってもらえないのに何の家族会議さ。

佐和子 お帰り。

宗一 お帰り。

綾子 ……お帰りなさい。

邦彦 ……変わってるよこの家は。

綾子 何がよ。

邦彦 食事ひとつとっても変さ。この家は一週間の献立通りのものが食卓に並ぶんだ。肉が食べたいと思っても欲求は無視されてメニューの魚が出る。胃の具合が悪くたって今晚はカレーライスと決められる。味気ないよなあ前もってわかっちゃってるのって。今晚何だろうって、ワクワクしながら帰る楽しみもって一度も味わったことないもんな。

宗一 そんなことはない。わたしだって臨機応変てことは心得ている。

綾子 そうよ。スーパーの隣の魚吉に活きのいい鯛があったって、すき焼きが摘みれ汁になるってしょっちゅうよ。

邦彦 へえ、この二年でおじいちゃんはすっかり腕をあげたってこと？ そりゃ御愁傷さま。

宗一 よし！ 今晚はステーキに変更だ。サーロインかいそれともフィレかい。どっちが好みだ。

佐和子 今日日曜日。あたしの当番。

宗一 いいよわたしが作るよ。

邦彦 俺いらんよ。

佐和子 こんな天気だし、ありあわせで済ませましょよ。

宗一 合羽着てきやどうってことない。(去る)

佐和子 いるの？

邦彦 なにが？

佐和子 家に寄りつかないのは女に決まってるってタカおばさん。

邦彦 女？ アハハ。タカばっばらしいや。

綾子 ふたりとも何暢気なこと言ってるのよ。今あたしたちが話し合わなければならぬのはそんなことじゃないでしょ。家族の問題なのにどうしてあたしだけこんな心配しなきゃならないのよ。

邦彦 家族かあ。俺思うけどさ。血のつながりよりひとつ屋根の下で暮すことの方が

綾子 家族の意味合は大きいんじゃないかな。おじいちゃんと母さんのように。

綾子 じゃお兄ちゃんは何なのよ。

邦彦 俺か？ うん……そうだな。何なのかな。アハハ。ま、巢立ってたって思っ

てよ。

綾子 国語力ゼロ！ 巢立って自分ひとりで餌を見つけて生きていくことなの！
仕送り受けて何の巢立ちよ。

佐和子 何がいいの？

邦彦 ん？

佐和子 コーヒー。紅茶。日本茶。それともお抹茶？

邦彦 帰ってきて迷惑みただな。

佐和子 そうじゃないわよ。今一番飲みたいものを出してやろうと……。そうね、二年振りなんだからもっとうきうきするのね普通の母親は。変なのねやっぱりあだし。

邦彦 ……日本茶。薄めの。

佐和子 薄めね。(去る)

綾子 普通でいられる筈なもの。昨日の今日よ。おじいちゃんもお母さんも何にも言えないしあげくおじいちゃん卒倒しちゃうし——大変な時にお兄ちゃん居ないんだから。

邦彦 俺は関係ないだろ。

綾子 長男でしょ！ 責任あるでしょ。

邦彦 何の責任さ。

綾子 だから——平気なの？ この家なくなるのよ追い出されるのよあたしたち。いのそれで。

邦彦 言ったんだろ伯母さんおじいちゃんと同居するって。いいんだよ娘が面倒見る方が。

綾子 じゃあたしたちどうなるのよ。

邦彦 マンション借りる位なら母さんできるだろ。バブルがはじけて値下がりしてるそうだし買うなら今がチャンスかも。いい踏ん切りつけさせてくれたと思えばいいのさ。おじいちゃん死んだら相続するの伯母さんだしどのみち出てかなきゃならないんだから。

綾子 おじいちゃんは死んでない。

邦彦 いつ死んでもおかしくない歳なの！

綾子 あたしたちもおじいちゃんの孫よ。権利あるんじゃないの。

邦彦 俺ね、興味ないの。だから調べる気ない。だけど母さんに権利ないのだけは確か。十五年タダで住めたってこと。

綾子 タダじゃない！ 知ってるくせに。

佐和子 (お茶を運んできて) この家はなくなるわ。

綾子 お母さん——。

佐和子 もって五年だって高橋工務店に太鼓判押されたの。建て替えの時期にきてたのよとっくに。築四十年越えてるもの。よくもったわ。あなたたちが生まれて育った家はなくなるの。

綾子 だったらお母さんが建てれば？ お母さんお金ないの？

佐和子 あたしには権利ないの。

邦彦 おじいちゃんは何て言ってるのさ。

佐和子 この家で死にたいって。

綾子 死にたいって言ったのおじいちゃん！

邦彦 無理。おじいちゃん五年じゃ死なない。

綾子 ……。あたしたちどうなるの。

佐和子 どうか捜さなくちゃね。

綾子 言いなりになるの鈴子伯母さんの！——どうしてよ。どうして何も言わないの。いつものお母さんらしくない。

佐和子 言いたいことはいっぱいあるわ。

綾子 言つてよ。聞くわよ聞きたいわよ。言えるでしょ今誰も居ないんだからお兄ちゃんとお母さんとあたしの、正真正銘母子水入らずなんだから。

佐和子 母子で愚痴言い合つても仕方ないことなの。この家は早晚建て替えなきゃならないの。鈴子伯母さんが建て替えておじいちゃんと住むと言つてくれるの。あたしには何の権利もないの。

綾子 だから——お母さんは伯母さんが建て替えるのを前提にしてるでしょ。決まつたわけじゃやないわ。だつておじいちゃんはオーケー出してない。卒倒しちゃうんだから。

邦彦 あのさ、今日になつても何も言わないつてことは、オーケーつてことなんだよ。諦めるんだな。この土地はおじいちゃんのものなんだから。決定権はおじいちゃんにあるの。

綾子 そうなのよおじいちゃんよ。何で黙つてるのよ。黙つたら伯母さん明日にもこの家壊しかねないんだから。

邦彦 ご飯作つたり掃除したり、おじいちゃん嫌になつちやつたんじゃないの。

綾子 それはない。自らすすんで楽しそうにやつてるもんおじいちゃん。頼んだことないよあたし弁当作つてつて。ねえお母さん。

邦彦 だからさ、娘を選んだつてこと。言つたら、娘夫婦と暮す方がうまくいくつて。あんなの娘と言える？ ちつとも寄りつかなかったのよ。

邦彦 おじいちゃんも世間並の親だつたつてことさ。ちよつと意外だつたけどな。

綾子 娘の方を選んだつてこと？

邦彦 ……。

綾子 お母さんだつて娘みたいなものじゃない。ねえお母さん。

佐和子 死ぬのここだと思つた。

綾子 何よいきなり。

佐和子 結婚するまで三年と同じ家に住んだことなかつたの。小学校が四回。中学二回。高校も二年の三学期半ばにお父さん、塚田のおじいちゃんがまた転動になつて

下宿にかわったの。親と離れるの初めてだった。家族はいつも一緒。単身赴任、あの頃もあるにはあったんだらうけど、ずっとついてったわ。大学も寮や部屋借り。だから卒業と同時にこの家にお嫁にきた時、ものすごくホッとしたの。ああもう引越さなくていいんだって。ずっと……。死ぬのここなんだって。何だっけ？ 家付きカー付きババ抜きか？ ババもジジも居たけどな。そうじゃなくてー。融さんは一人息子だもの。融さんと結婚するってことは同居ってことなのよ。あたしたちの世代はそうだったわ。そうね、そういう世代の最後なのかもね。

綾子

死ねないのよここではお母さん。

佐和子

……。

綾子

死にたかったら闘おうよ。許せないのよ伯母さんの身勝手が。聞いてみる！ 良子のおとうさん弁護士なの。遺産相続と居住権。

佐和子

よしてちょうだい。

綾子

どうしてよ。

佐和子

権利だの義務だのこの家に暮してきたわけじゃないもの。そんなものでひと

くくりにして欲しくないわこの十五年を。

綾子

あたしとお兄ちゃんに相続の権利があったらどうするの？ お母さんに邪魔する権利はそれこそない筈よ。

佐和子

おじいちゃんの生きてるうちにそんなこと考えないでちょうだい。

綾子

だって……。今この家を出てしまったら、あるかもしれない居住権までなくすことになるじゃないのよ。

邦彦

出ちゃう方がいいと俺は思うな。身軽になれるんだよ母さん。仕事もってるから食べていけるんだしさ。

佐和子

あなた就職どうなったの。

邦彦

あのさあ、そのこと話して寄ったんだけど誰も相手にしてくれないし。

綾子

決まったんだお兄ちゃん。

邦彦

……。まだなのか。

綾子

決まった。

佐和子

あら！ 昨日のこと？

綾子

決めれば決まるってこと。あたし次第。

佐和子 ……希望通りじゃないのね。

邦彦 何狙ってたんだ。まさかスチュワードスってんじゃないよな。無理その容貌じゃ。それに去年も今年も募集殆どしてないだろ。

綾子 そんなんじゃないわよ。

佐和子 商社よね。

邦彦 この時期にまだ商社狙ったって——。

綾子 商社って言えないこともないわ。

佐和子 そう！ よかったじゃない。

綾子 よかったって……。今流行りの直輸入販売の……小さいの。社長を含めて社員八人。

邦彦 冗談言うなよな。それじゃ商店じゃないか。

綾子 株式会社なの！

邦彦 商社なら健二郎おじさんに頼めばよかったんだ。何やかや言ったってコネは強いぞ。この不況じゃまともないこうたって——。

綾子 あんな奴！ 死んでも頭下げるもんか。——いい！ 決める。英語活かせるし。

佐和子 あんたはどういう所？ 北海道？

邦彦 俺進学。

綾子 何よそれ！

邦彦 五年後に教授が定年になるんだ。修士終えて博士課程に在籍してれば順繰りに講師の席に俺を推薦するって、教授が約束してくれたんだ。俺、教授に受けいから。今日も教授のお供で名古屋の学会の帰り。論文も手伝ってるし——。

綾子 そんなの無い！ 大学院なんて不公平よ。短大よあたし。

邦彦 勉強嫌いだからって自分で決めたろ。

綾子 嫌いじゃないわよだけど——あたしも進学する。大学部に編入試験受ける。二年たったら状況変わって就職うまくいくかもしれないもん。今最悪。底の底。

邦彦 そんな確証どこにあるんだよ。

綾子 お兄ちゃんだって確証はない！

邦彦 決めたのもう。試験受けたんだから。

綾子 何よ！ どうしてあたしがいつも貧乏籤引かなきゃならないのよ。勝手にお兄ちゃんはいつも勝手。お兄ちゃんが東京の大学選んでたらあたしも四年制に行

けたのよ。お母さんの大変さわかってたら仕送り必要な遠い北海道選ぶ筈がない。

邦彦 悪かったな東大が受かる頭でなくて。

綾子 逃げたのよ。お兄ちゃん逃げたんだわ。

邦彦 わかったような口きくな！ 何も知らないくせに。

綾子 知らないのはそっちよ！ 知らなすぎるわこの家のことを。居ないから。昨日居合わせたらお兄ちゃんもきつと腹を立てた筈よ。お母さんの口惜しさわかった筈よ。

邦彦 母さん俺いくからな大学院。

綾子 あたしもいく！

佐和子 あたしにどうしろというの！ 何が出来るというのよあたしに！

邦彦 家のことと俺の進学は別のことだろ。冷静になれよな。

佐和子 何が別なのよ全部あたしにかかわってくるでしょうが！ 誰が学費出すの？

あたしでしょ。この家出てマンション買えって言ったわね。そのお金どこから出てくるの？ 借金するの誰？ あんたたちお金の算段したことあった？ あ

んたたちにお金の心配させたことあった？

綾子 ……お母さん……。

邦彦 ……。

佐和子 ……。融さんが、あなたたちのお父さんが亡くなって、何もかもひとり処理してきたわ。来年三月ふたりとも卒業する。やっと一段落つくって、楽しみに待ってたのに……。

邦彦 いいよ自分で稼ぐから。

佐和子 あたしは何なの？ 事後報告だけで何の意見も言えないってこと。何あたしってあんたたちの？

邦彦 ……。

佐和子 ……そうよね、ふたりとももう成人なんだもの。何でも自分で決められるのよね。もうあたしの役目は終わったってことね。

綾子 お母さん……。

邦彦 フー。タイミング最悪。ああ疲れた。(時計を見て)二時間は眠れるな。五時に起こしてよ。教授の軒で二晩眠れなかったんだ。ちょっと眠るよ。

綾子 駄目！

邦彦 どけよ。俺の部屋に行くんだから。

綾子 あたしの部屋だものも。

邦彦 ……俺の居場所はこの家にはもうないってことか。フッ。何が家族さ。

佐和子 邦彦が帰ったら明けるって約束でしょ。ベッドだけでも明けなさい。

邦彦 いいよもう。女の臭いの中で眠れるかよ。

佐和子 綾子！

綾子 わかったわよ。(去る)

佐和子 受験の時だけって約束だったんだけど。

邦彦 元々俺の部屋じゃないからな。

佐和子 あの机で勉強したかったのよ。自慢してたでしょ父さんの机だって。綾子羨ましがってたから。

邦彦 使いたい者が使えばいいさ。ま、どっちみちなくなる家なんだから。せいせいするよな。

佐和子 せいせい？ ——どうして？ あなたたちここで育つたのよ。思い出がいっぱ

いつまってる筈よこの家には。

邦彦 ……いい思い出ばかりでもないんじゃないのかな。

佐和子 え？

邦彦 ひどかったよなあおばあちゃん。子供の俺を感じるくらいだったから相当の嫁いびりだったんだろ。父さん死んだ時、だからきつと出ていくと俺思った。だけど母さん動かなかった。

佐和子 どこに行けたのかしら。あの時出てたらあなたたちを大学に行かせられなかったと思うわ。

邦彦 そうだよな。出ていくことなかったよな。おじいちゃんはものすごくやさしかったから。

佐和子 ……どういうこと？

邦彦 ……おじいちゃんと佐和子さんをしっかり見張っててね。

佐和子 え？

邦彦 月曜の朝決まって言われたんだ。布団に坐って手招きをして俺の手を握りしめて言うんだ。せえせえ息しながら。邦ちゃん、おじいさんと佐和子さんを一週

間しっかり見張っててね。頼むわねって。

佐和子 おかあさんが……。

邦彦 わかんなかったよ。ずっとわかんなかったよ。アハハ。笑っちゃったよ俺。おばあちゃんが女だったって気がついたとき。

佐和子 見張られてたのあたし。見張られなくちゃならないことあって？

邦彦 ……忘れてるんじゃないのか。おじいちゃんとは他人だってこと。

佐和子 他人？——他人て何よ！

邦彦 おじいちゃんの前で平気でパジャマのままうろついたり、湯上がり濡れた髪をタオルでくるんだままおじいちゃんに肩揉んでもらったりする母さんを見るのってあんまりいい気分のものじゃないってことだよ。

佐和子 そんなとおかあさんに見せたことないわよ。

邦彦 見たくないのは俺。

佐和子 ……そんな眼であたしのこと見たの。だからなの？ だから北海道に行っちゃったの？ ここに帰ってきたくないから進学するの？

邦彦 ……。

佐和子 口惜しいわ。恥ずかしいわ。ずっとそんな眼であたしのこと見てたとしたらあ

たしは——あたしは必死で生きてきただけなのに。

邦彦 おばあちゃんの気持は気持さ。そう思ってしまった人間の気持はどうしようもないだろ。

佐和子 あなたの気持のことよ。

邦彦 言ったら。おばあちゃんの女の気持に気がついたって。俺が言いたいのは実の親子のように振る舞えて幸せねって、言ってくれる人間ばかりじゃないってことだよ。

佐和子 実の親子のようにふるまってどうしていけないの？ だってそうしなければ、娘に成りきらなければ暮していけなかったわ。

邦彦 母さんは娘じゃない。嫁だ。

佐和子 邦彦あなた……。

邦彦 おじいちゃんが掃除も洗濯も一切合財何もかもやっていることを母さんはどう思ってるんだ。娘に成りきったら構わないことなのか？ 当たり前じゃないよ。振る舞うってことは、立場何なのかって、わきまえた上のことだろ。おじいち

やんも、母さんも、振る舞うことを越えてしまってる。

佐和子 (ワナワナふるえて) あたしは……あたしは……ひとに誘^そられるようなことはしていない！

邦彦 ……。ならいいじゃないか。

佐和子 ……。

間。

邦彦 フッ。こんなこと言うつもりなかったよ。母さんのしたり顔みてたら……。□
惜しいんだろ母さん。ほんとはおじいちゃんを張り倒したい気分なんだろ。何
で自分じゃなくて伯母さんなんだって。この十五年何だったんだ。権利が何だ
義務が何だって。喚いてくれた方がよっぽどまともだよ。綾子が言ったじゃな
いか。聞いてやるって。俺だって——。

佐和子 何が言えるのあたしに！ 息子にそこまで言われて——疑われて——……。

邦彦 俺はだから——。

佐和子 もういい。

邦彦 ……。

間。

邦彦 俺行くから。(上着をはおる)

佐和子 え？

邦彦 教授と羽田でおちあうことになってる。最終便。ちょっと早いけど行くよ。

佐和子 ……泊まってくんじゃなかったの。

邦彦 ……。進学のこと相談しなくて悪かったよ。仕送りはいいよ。バイトで何とか
やってけるから。——じゃ。

邦彦去る。

間。

綾子 (枕やシート、大きな袋をひきずりながら入ってきて) いいわよ。ちゃんとシ
ツ替えたからね。お母さんお兄ちゃんの枕どこだっけ？

佐和子 行っちゃったわ。